様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０４３５１

研究課題名（和文）声の実践によるテキスト共同体―東南アジア大陸部の仏教写本をめぐる宗教実践

研究課題名（英文）Text communities constituted through the oral: a study of the religious practices related with Buddhist manuscripts in Mainland Southeast Asia

研究代表者
村上　忠良（Tadayoshi, Murakami）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・教授

研究者番号：５０３３４０１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東南アジア大陸部の上座仏教徒諸民族の仏教写本をめぐる諸実践を調査し、その特徴を明らかにすることを目的とした。スリランカから東南アジア大陸部に広がるパーリ経典を共有する上座仏教が、ローカルな言語で書かれた仏教写本の朗誦実践によって、複数化されていく様相に焦点を当てた。本研究では、ミャンマー東南部・タイ国西部のモン、ミャンマーとインド国境のシンポー（カチン）、タイ北部のシャンなどの仏教徒少数民族の仏教実践の実態を明らかにすること、またミャンマー西南部のラカイン王国の王統記の貝葉文書についての基本的な情報を収集し、整理することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東南アジア大陸部のタイ国やミャンマーには、多数派を占めるタイ人（タイ族）やビルマ人（ビルマ族）以外に数多くの少数民族が居住している。その中でも、本研究が対象としているシャン、モン、ラカイン、シンポー（カチン）などの民族は、東南アジアと東アジア・南アジアを連結する重要な地域に居住する民族であり、歴史的にも文化的にも重要な役割を果たしてきた。しかし現在は両国の少数民族であり、これらの民族についての研究が十分になされてこなかった。本研究は、研究蓄積が少なかった東南アジア大陸部の仏教徒少数民族の仏教実践の実態を明らかにしたものであり、東南アジア大陸部の社会や文化の理解に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to explore the features of religious practices related to Buddhist manuscripts among the Buddhist minorities in mainland Southeast Asia. We focused the pluralization of Theravada Buddhist tradition which share Pali, the sacred language of scriptures, through the manuscripts-recitation in vernacular language at local situations in mainland Southeast Asia.　In this research we collected and analyzed the data on the religious practices of Buddhist minorities such as Mon in Myanmar, Singpo (Kachin) in the borderland between India and Myanmar, and Shan in Northern Thailand. In addition to the religious practices of the Buddhist minorities, we collected the basic data on the palm-leaf manuscripts of history of Arakan kingdom.

研究分野：文化人類学　タイ地域研究

キーワード：写本文化　仏教　声と文字　テキスト共同体　宗教実践　東南アジア大陸部

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「世界宗教」が東南アジアにおいて受容される様態は、これまで多くの研究者の関心をひいてきた。これらの先行研究では、文字（聖典・経典）を有する「世界宗教」の教えが、いかに東南アジアのなかで変容し、実践されているかという点に関心が置かれてきた。そこでは、「書かれたもの」（聖典・経典）＝教義、「人々の行い」＝実践という枠組みが前提とされ、「書かれたもの」は文献学・歴史学・文学の研究対象、「人々の行い」は社会学・人類学の研究対象とされてきた。しかしこれらの分業的な研究枠組みでは、「書かれたもの」を読み、書き、写すという行為（実践）の持つ意味が、また宗教実践の中での「書かれたもの」の果たす役割が、見落とされがちである。但し、近年の仏教研究の中では、このような問題点の克服を目指し、仏教学者・文献学者によって仏教文書をそれが置かれた社会的文脈に戻し、その運用形態を研究する「写本文化」研究の方向性が提示されている（Berkwitz, S.C. et.al. 2009）。

２．研究の目的

本研究は、このような「写本文化」研究の問題関心を下敷きにして、東南アジア大陸部の上座仏教徒による仏教写本に関わる宗教実践の形態を分析したものである。東南アジア大陸部の上座仏教徒諸民族の仏教写本をめぐる諸実践の実態の解明し、その特徴を明らかにすることを目的とした。特にローカルな言語で書かれた仏教写本の朗誦実践に着目することで、スリランカから東南アジア大陸部を広く覆うパーリ経典を共有する上座仏教という「聖なる共同体」が、仏教写本の朗誦によって創り出されるローカルな仏教実践によって、複数化されていく様相に注目した。

３．研究の方法

本研究では、ブライアン・ストックが提唱した「テキスト共同体」の概念をキーワードとした（Stock 1983）。「書かれたもの」（テキスト）は、単にそれに精通した識字者や何とか読み書きができる半識字者のみならず、識字者がテキストを声にして伝える説法を通して、テキストの内容やテキストが持つ権威を受容する非識字者も含んだ「共同体」を形成するというものである。ストックは中世キリスト教における異端派や改革派の分析概念として提示したが、東南アジア大陸部の仏教世界における「書かれたもの」（仏教書・仏典）に関わる宗教実践の分析においても、上記の点は有効である。テキスト（仏教書・仏典）、テキストに精通した専門家（僧侶・在家朗誦師）、専門家の口頭の宗教実践（説法・朗誦）、その声を通してテキストを受容する信徒という構造は共通している。東南アジア大陸部のさまざまな地域で仏教実践によって形成される「テキスト共同体」の実相を、現地でのフィールドワークあるいは文献資料の分析を通して明らかにした。

４．研究成果

これまでほとんど研究が進んでいなかった、ミャンマー東南部・タイ国西部のモン、ミャンマーとインド国境のシンポー（カチン）などの仏教徒少数民族の仏教実践の実態を明らかにすることができた。タイ国北部のシャンについては、すでに在家朗誦の研究は行われていたが、新たな朗誦実践（女性信徒の集団朗誦）を明らかにすることができた。また同じく、基礎的な研究資料の整理がほとんどなされていないミャンマー西南部のラカイン王国の王統記の貝葉文書についての基本的な情報を収集し、整理することができた。

(1) 東南アジア大陸部の仏教少数民族の仏教実践における仏教書・仏典朗誦の実態

①和田理寛（研究分担者）「モンのジャータカ朗誦文化―重なり合う文化圏―」

ミャンマーの少数民族モン（Mon）のジャータカ朗誦実践の実態把握を試みた。モンは東南アジア大陸部において、古くから文字文化の痕跡を残すとともに、特有の仏教美術を発展させ、また後世にはスリランカとの交流にもとづいたサンガ改革を行うなど、同地域の上座部仏教史のなかではよく知られた存在である。現代において「モン仏教」と呼べるような固有の実践があるのか、それはタイ仏教やミャンマー仏教の広がりといかに重なり合うのか、その一端を現地調査によって明らかにしようと試みた。

現地調査は 2020 年 2 月に 16 日間、ミャンマーのヤンゴンとモン州にて実施した。この調査では主に朗誦実践関係者への聞き取りや関連史料の収集を行った。その後、当調査でえられた知見を考察した結果、以下のことが明らかになった。

ミャンマーのモン州では現在でもモン語によるジャータカ朗誦が行われている。これは読み手の違いに沿って、出家者（仏教僧）による朗誦と、在家者による朗誦の 2 つに分けられる。前者は、出家者が「布施太子本生譚」を在家者にむけて読み聞かせる行事であるが、こうした実践はビルマ系住民が住む地域ではほとんど行われていないと報告されており、むしろ国境をまたいだタイ仏教圏と共通している。また、モンの実践は同朗誦を雨安居期間中にも行う点で中部タイと共通する一方、合わせて「マーライ経」を朗誦する点においては中部タイではなく北タイ・

東北タイと共通していることがわかる。このようにモン語の朗誦は、これまで先行研究によって指摘されてきた布施太子本生譚の朗誦実践の相違をめぐる地域区分(タイの中部・北部・東北部、およびミャンマー)はまだ不十分であり、これらとは異なる独自の実践があることを示している。また今回の調査では、モン語の布施太子本生譚朗誦は、タイのような村落伝統ではなく、朗誦僧団が各地域に出向いて上演するいわば巡業型の行事であることも明らかになった。

もう 1 つの在家者による朗誦は、かつてはモン地域にて広く行われていたものの現在ではかなり少なくなっている。そうしたなか朗誦者である「読本師」(モン口語:アチャー・ハウォフ)の 2 人から聞き取りをすることができた。そのうちの 1 人は今も現役で朗誦を行っており、人が亡くなったときに民家でジャータカを読んだり、また雨安居の布薩日に僧院で寝泊まりする在家持戒者に対して仏教徒の模範的行為について書かれた本を読み聞かせている。さらに朗誦テキストにはタイ国北部発祥ともいわれるパンニャーサ・ジャータカも含まれる。

以上のようにミャンマーのモン語コミュニティの事例から、国境や地域をまたいだ仏教写本の朗誦実践の多様性と新たな広がりが浮かびあがってきた。

＜今後の課題＞

今回収集できたモン語の仏教テキスト(印刷本と貝葉書)の読解に取り組み、それらを近隣言語資料と比較する必要がある。仏教写本の朗誦実践に加え、その内容にも踏み込むことで、現代の国境線をこえた地域間の交流と重なりの多様な姿に迫ることができる。

②小島敬裕(研究分担者)「北東インドにおける声の実践とテキスト共同体―タイ系民族とシンポー族の事例―」

2017 年から 2019 年にかけて、北東インドのタイ系民族およびシンポー族を対象とする調査で得られた民族誌的データの分析を、他地域における実践との比較の視点から行った。具体的には、文字を持つタイ系民族と、独自の文字を持たないシンポー族の仏教実践に注目し、それぞれの声の実践と「テキスト共同体」の実態の特徴を明らかにした。その上で、シンポー族と同民族系統に属するカチン族の仏教徒化を「タイ族化」ととらえた人類学者リーチらの民族論的研究を批判的に検討しつつ、北東インドにおける各種の言語・文字で書かれたテキスト(仏教写本・仏教書)の流通と朗誦実践、そして仏教実践を介した「共同性」の形成に着目した。その結果、以下の諸点が明らかになった。

まずタイ系民族は、インド北東部の出家慣行によって僧侶が恒常的に不足しており、他民族の僧侶を住職として招くことも多い。その場合、住職はタイ族語での説法ができないため、アッサム語またはヒンディー語で説法を行う。一方の在家者による仏典朗誦では、タイ文字の仏教写本をタイ族語できかせている。

これに対し、シンポー族の僧侶は、シンポーの在家に対し、シンポー語で説法を行う。一方、在家者による朗誦の形態はタイ系民族と共通しつつ、アッサム語/ヒンディー語の仏教書をシンポー語に翻訳してきかせる点で両者には相違が見られる。

このように、シンポー族による仏教受容という事実のみに着目すれば、リーチの指摘したように、これを「タイ族化」ととらえる見方もできるかもしれない。しかしその内実に着目すると、必ずしもタイ族の仏教実践との同化を意味するわけではなかった。またイギリス植民地時代およびウー・ヌ政権期においてはミャンマーからの布教僧の活動によりビルマ仏教の影響を受けている。その後ネーウィン政権期の「鎖国」政策によりネットワークは断たれたが、現在ではインドの仏教復興運動後に普及した仏教書が大きな役割を果たす。

このように、北東インドにおいては、東南アジア大陸部と類似する「テキスト共同体」が形成されつつも、テキストや声の実践に用いられる言語には、国境を超えた地域や同一国家における他民族の影響も見られる形で、独自の実践が構築されていることを明らかにした。

＜新たな課題＞

一方で、シンポー語の仏教書は、アッサム文字を借用し、シンポー独自の節回しで押韻した１冊を発見するにとどまった。これは、独自の文字を持たなかったミャンマーのパラウン族が、自民族の言語による「パラウン仏教」の構築を試みていることと比較すると対照的である。今後、このシンポー語の仏教書を誰が作成し、どの程度、使用されているのか、そして使用されていないとしたら、なぜなのか、といった問題を考察することにより、仏教実践と民族間関係についての議論をさらに深化させていくことが課題である。

③村上忠良「衰退する誦経・朗誦、新たに生み出される誦経・朗誦」

これまでの研究から、東南アジア大陸部の仏教書・仏典の朗誦は、出家のみならず在家信徒によっても担われてきていること、しかし、歴史的に見ると 20 世紀初頭から半ばにかけて、在家朗誦の実践は衰退していったことが明らかである。特にタイ国では現在伝統的な「仏教文学」として継承されている作品はそのほとんどが朗誦されるためのものであったが、朗誦実践が失われた結果、多くの朗誦テキストが「仏教文学」として継承されている。しかしこのような朗誦文

化は衰退の一途を辿るのかという点について関心を持ち、2019 年 9 月と 2020 年 2 月にタイ国中部とタイ国北部で行った現地調査の資料を分析し、以下の事が明らかとなった。

現在において、在家信徒による朗誦の実践は、全体的には衰退の傾向がみられるが、新たな朗誦実践の誕生も見られる。研究協力者のポーラミン（2013）は、近年興隆を見せる在家信徒による瞑想実践の中に、伝統的には葬儀などで僧侶が朗誦し、会葬者に拝聴させるテキストであったマーライ経朗を瞑想の一環として自らに聞こえる程度の声で朗誦する方法をとる在家信徒の瞑想グループの存在を指摘している。瞑想参加者各人がテキストを自分自身のために朗誦するという点では、識字者が非識字者に対してテキストを朗誦し聞かせることで形成される「テキスト共同体」ではないが、同じテキストに瞑想実践上の意味を見出し、テキストを共有する瞑想集団が形成されている点が特徴的である。

村上は、タイ国北部のシャンの女性信徒によるタンマチャッキャー（初転法輪経）の集団朗誦に注目し、在家信徒による新たな朗誦実践の誕生の事例として、以下の点を明らかにした。英領植民地期のビルマの仏教運動の中で生まれてきた在家信徒の朗誦実践である「初転法輪経」（パーリ語テキスト）の集団朗誦が、20 世紀の半ばにミャンマー国内のシャン仏教徒の中で受容され、さらに朗誦されるテキストがパーリ語のものから、パーリ語を含んだシャン語のテキストへと「翻訳・編纂」されたもの（タンマチャッキャー）が使用されている。そして、シャン州内で行われていたタンマチャッキャー（初転法輪経）の集団朗誦の実践が、人の移動と共にミャンマーからタイへと越境して実践されている。

また在家信徒の朗誦はないが、僧侶による攘災・祝福儀礼の一環としておこなわれる「パーンヤック経」の朗誦は、従来の護呪経の朗誦とは異質の特徴を持つが、タイの都市部において 1990 年代から流行しており、現在も主としてタイ中部において行われていることを確認できた。

以上のように、これまでは伝統的ではあるが衰退傾向にあると考えられて来た仏教書・仏典の朗誦実践の現代的展開についての知見を得ることができた。

(2) ミャンマー西南部のラカイン王朝期の貝葉文書・碑文についての基本的な情報

池田一人（研究分担者）「ラカイン王統記貝葉文書の研究」

分担者は従来、近現代ビルマ領域で少数民族という位置づけのカレンの歴史意識の形成過程を研究対象としてきた。したがって当初は「カレンの写本と歴史意識」というテーマを念頭に置いていたが、分担者の関心が 19 世紀以前の状況に移り、ビルマ王朝に匹敵する長い王朝伝統を保持するラカインへの研究対象の変更を行うこととなった。

＜ラカイン史概要と位置づけ＞

ラカインは現代ビルマ世界ではビルマ語の一方言とされるラカイン語を話す一少数民族と認識されている。しかし、ベンガル・イスラーム世界に接するラカイン地方に長らく独自の上座仏教王権のムラウ朝を営み（350 年）、18 世紀末からビルマ王朝に征服され（40 年）、ビルマ王朝と西方の英勢力との最初の角逐の舞台になったことにより早くから英領化され（120 年）、そして 1948 年ビルマ独立以後はビルマ国家の一領域として組み込まれた。2010 年代以降に国際的に耳目を集めたロヒンギャの難民問題・民族問題の主要な舞台となった。

＜研究活動の概要＞

コロナ禍による現地調査が難しくなったこともあり、第一に王朝期の史料整備、第二にビルマ王朝征服期のラカイン歴史観とイスラームとの関係性という二つのテーマについての基本情報の収集という基礎研究を、在ミャンマーのラカイン史研究者のゾーリンアウン（Zaw Lynn Aung）氏をパートナーに迎えて行ってきた。

第一の点については、ラカイン前近代史研究においてはまだ整備されていない碑文史料と貝葉史料の基本的なデータベースの構築といくつかの王統記の電子データ化を行った。第二に、インド洋交易で栄え、北西のベンガルのイスラーム世界と交渉してきたラカインの上座仏教王朝ムラウ朝にとって、濃厚なイスラームとの関係とビルマ王朝による征服（1785 年）は、その歴史意識の形成において重要な要素であった。この 2 つにテーマを定めて具体的な史料収集と分析をすすめた。

＜ゾーリンアウン氏とのオンライン研究会の開催＞

ゾーリンアウン氏は 2021 年春までヤンゴン大学歴史学部の教授職にあり、2021 年 10 月から 3 か月のあいだ、阪大予算によって大阪大学大学院言語文化研究科に招聘研究員として滞在する計画が確定していたが、諸般の事情により来日がかなわなかった。代替案として、オンライン研究会を分担者（池田）と開催することになった。

オンライン研究会は 2021 年 8 月から 2022 年 3 月末まで、合計 28 回にわたって行った。主として基本史料の整備と上記テーマについての各種史料の基礎的検討を行った。

＜成果と課題＞

第一に、主として 18～19 世紀にビルマ王朝征服の前後に編纂されたいくつかのラカイン語王統記の貝葉文書のうち、①『ンガミ・ラカイン王統記（Ngami Rakhine Yazawin）』（1844）、②『ラ

カイン小王統記（Rankhine Yazawin Nge）』（1762 年）、③『ラカイン・マハタマダ王事績記（Rakhine Min Mahathamada Raza Ayebon）』（1790 年頃）の 3 点の電子化を行うことができた（別財源を使用）。①と②は大英図書館オリエンタル・インド省コレクションのフェーヤー・コレクションの一部である。③はヤンゴン大学付属図書館所蔵の貝葉文書である。3 点をビルマ語ユニコードによって電子化し、検索などが可能な文字データベースにすることができた。

第二に、ビルマ征服時代の事績を記した『ミッジーマデータ事績記（Mijjima Desa Ayedawbon）』を入手し、内容検討を始めることができた。

ラカイン前近代史料については全体を見渡すことができる史料カタログが不在であり、とくに貝葉文書のカタログをつくることがゾーリンアウン氏との研究会の当面の目標となる。上記 2 テーマもこれ以降も継続して深めていく予定である。

(3) 研究プロジェクトで得られた知見と課題

①得られた知見

在家と出家の区別を明確にする上座仏教の伝統の中で、朗誦実践は必ずしも出家者（僧侶）の側のみに属するものでないことが明らかになった。これまで在家朗誦については、ミャンマーのシャン州、タイ国北部、中国雲南省徳宏地区のシャン（タイ族）の事例研究が進められてきたが、出家者・在家者に共通する朗誦実践が東南アジア大陸部の上座仏教社会に広く見られることが明確となった。但し、選好される朗誦テキストは、それぞれの民族、地域によって多様であり、布施太子本生経やマーライ経といった現在でも見られるテキストの朗誦のみならず、民族語で記された多様な朗誦テキストが存在していることが分かった。また、朗誦実践も地域の歴史的・社会的な状況を反映し、朗誦されるテキスト、言語、朗誦者の属性などに変化が生じており、朗誦文化の動態を見ることができた。

在家朗誦自体は、タイ国やミャンマーという国単位でみると、全体として衰退の傾向がみられるが、東南アジア大陸部の仏教徒諸民族の中では現在においても実践されている。また、伝統的な朗誦実践を下敷きにしながらも、近年になって新たな朗誦の実践が誕生してきていることも明らかにすることができた。

②課題

2020 年から新型コロナウイルス感染症拡大のため、2020～2021 年度については現地調査を行うことができなかった。そのため、研究対象の朗誦実践についてのデータが必ずしも十分に得られたとは言えない。東南アジア大陸部仏教徒の朗誦実践についての、さらなる詳細なデータの収集が必要となることは今後の課題である。

また、本研究は人類学・歴史学の研究者による朗誦実践の研究であるが、同じく「書かれたもの」の社会的・文化的特徴を考察する仏教学・文献学の立場からの「写本文化」研究（Daniels 2012, McDaniel 2008, Veidlinger, 2006, Womack 2005）の知見を含めて、テキストと実践両面から、東南アジア大陸部仏教徒の「テキスト共同体」の実態をより立体的に把握する可能性を模索する必要がある。

【参考文献】

Berkwitz, S.C. et.al. eds. 2009. *Buddhist Manuscript Cultures: Knowledge, Ritual, and Art*. Routledge.

Daniels, Christian. 2012. “Script without Buddhism: Burmese Influence on the Tay (Shan) Script of Mang Maaw as Seen in a Chinese Scroll Painting of 1407.”.*International Journal of Asian Studies*, 9(2): 147-176.

McDaniel, J. 2008. *Gathering Leaves and Lifting Words: Histories of Buddhist Monastic Education in Laos and Thailand*. University of Washington Press.

Poramin Jaruworn（ポーラミン・チャールウォーン）2013. 『マーライ信仰―異なる調査フィールドでのプラ・マーライ経朗誦の動態』（チュラーロンコーン大学文学部、タイ語文献）

Stock, B. 1983. *The Implications of Literacy: Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*. Princeton University Press.

Veidlinger, D. 2006. Spreading the Dhamma: Writing, Orality, and Textual Transmission in Buddhist Northern Thailand. University of Hawaii Press.

Womack, W. B. 2005. “Literate networks and the production of Sgaw and Pwo Karen writing in Burma, c. 1830-1930.” Ph.D. Thesis, School of Oriental and African Studies, University of London.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 小島敬裕	４．巻 94
２．論文標題 戦中・戦後における日本人とミャンマー人仏教徒の交流	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宗教研究　別冊	６．最初と最後の頁 12‐15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 角田彩佑里・和田理寛	４．巻 20‐2
２．論文標題 ミャンマーの「ダウェー人」をめぐる民族分類と民族主義：公定民族分類は民族境界の固定化につながるのか？	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	６．最初と最後の頁 195-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 角田彩佑里・和田理寛	４．巻 20‐2
２．論文標題 ダウェー僧伽に関する覚え書：20世紀以降期のミャンマーとタイにおける宗派対立をめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	６．最初と最後の頁 230-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小島敬裕	４．巻 0
２．論文標題 ミャンマーにおける戦争中国国境周辺地域の変容ー少数民族タアーン（パラウン）の生存の技法	５．発行年 2020年
３．雑誌名 瀬戸裕之・河野泰之（編）『 東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略』	６．最初と最後の頁 233 - 261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 和田理寛	４．巻 8
２．論文標題 Buddhist Monastic Lists and the Making of a Mon Nation in Myanmar: Beyond Criticism of Fixed Ethnicity	５．発行年 2019年
３．雑誌名 AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies	６．最初と最後の頁 1－37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小島敬裕
２．発表標題 戦中・戦後における日本人とミャンマー人仏教徒の交流
３．学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 村上忠良
２．発表標題 仏教交流の実相への視座 －タイと日本の関係より－
３．学会等名 龍谷大学世界仏教文化研究センター研究セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 和田理寛、小島敬裕、大坪加奈子、増原善之、下條尚志、杉本良男	４．発行年 2021年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 204
３．書名 東南アジア上座部仏教への招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小島　敬裕 (Kojima Takahiro) (10586382)	津田塾大学・学芸学部・教授 (32642)	
研究分担者	池田　一人 (Ikeda Kazuto) (40708202)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・准教授 (14401)	
研究分担者	和田　理寛 (Wada Michihiro) (70814325)	神田外語大学・外国語学部・講師 (32510)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	チャルウォン　ポラミン (Jaruworn Poramin)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関